４月から学部１年生に物理を教えることになった。　この科目は物理学概論という通年で物理の全分野の入門編を網羅するものだ。　物理を専門としない自分が物理を教えることになったのは、単に大学改組で物理系の教員が不足したという理由によるだろう。　ともあれ教壇に立ち、新入生たちに物理を教え始めると、どうやらそれだけではなく、何かしら因縁のようなものも働いているような気 が、幾分している。

物理との縁は、高校２年の４月、京都で始まった。　京都には、先生方が私塾をもち受験勉強の指導もされている伝統がある。　多分、今もあるだろう。　これは、予備校に通うような軽いノリではなく、その先生の門下に入り稽古を受けるという、幾分覚悟の要るものだった。

そんな環境で、自分は週２回、物理の下妻清先生の塾に通い続けた。　下妻先生の板書、講義は常に簡潔かつハイペースで、たまに落ちる「雷」は鋭かった。全く油断できない教室だった。　そして２年間休まず教えを受けた頃、特に努力したり強く望んだわけではないのだが、いわゆる受験物理はかなり得意になっていた。　出来の決して良くなかった自分でさえ、東大模試で物理の成績上位者リストに名前が載るようになっていた。　（東大そのものとは、縁は なかったが。）

そんな浮世のご利益とは別に、２年の稽古の果てに、いつのまにかひとつの念のようなものが育っていた。

＜　物理はものの見方を変えようとする営みだから、物理を体得する（～当時は、試験で点をとること）には自分の思い込みやエゴに気がつくのが近道だな。。＞

これは、下妻先生がおっしゃったというよりは、おそらく先生の板書、雑談、一挙一動が、自ずと自分のなかに結晶したもののような気がしている。

先生は時折、戦時中の話をされた。

「君たちは戦時中は暗黒時代のように思うかも知れないけど、そんな訳でもなかったと、僕は思うよ。」

「僕は（軍の任務で）広島に原爆投下の前日の晩までいたし、軍艦にはさまれてあわや圧死することもあったけど、生き残ったね。　だから戦争の後、（お国の為というより、世界の）人のために生きようと決心したんだ。」

。。。光陰矢のごとし。

迂闊な私が下妻先生の教えを忘れているうちに、先生は他界されていた。
再び巡ってきたこの４月、自分は襟を正し、講義の準備をし、そして自分の持ち場に専念すべし、と決意している。
遠い４月、初めて下妻塾の門を叩いたときのように。

（４・１７・２０１０　京都へ向かう車中にて）